一人一冊

イデオロギーと日本政治
——世代で異なる「保守」と「革新」
遠藤晶久、ウィリー・ジョウ 著
新泉社（2019年2月）2,800円＋税／280ページ

評者

津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

明かされる世代間ギャップの実態

次のようなテストが出題されたら、あなたはどう答えるか。

Q「日本の政党のうち、どの政党が保守的で、どの政党が革新的だと思いますか」

A「そんなもの、自民党が保守で、共産党と社民党が革新に決まっているだろう」。

こう断言する読者の方々は、本当にそう即答してしまってよいのだろうか。そういう人こそ、本書の熟読をお勧めする。

本書の最大の貢献は、有権者の政党に対する認知が世代間で大きく異なるという重要な事実を発見したことである。単純化すれば、日本の有権者はイデオロギー的に見た場合、もはや昔と同じ状況にはない。世代間ギャップが存在するからである。

例を示すと、どの政党が最も「右」「左」に位置付けられるかと問われれば、日本の有権者は世代を超えて自民党を右、共産党を左とする。どの政党が最も「保守的か、革新的か」、「保守的か、リベラルか」と聞かれれば、自民党が「保守的な」政党であることに関しては世代を超えた合意が観察される。だが、どの政党が「革新的／リベラル」なのかを巡って、世代間に大きな差異が見られる。高齢層は冷戦期同様、共産党を「革新的」「リベラル」に位置付ける。それに対して、40代までの層は維新の会を最も「革新的」「リベラル」と見なし、共産党を中道に位置付けている（若年層では、共産党は「保守的」と見なされることすらある！）。

さらに、本書では、50代以上の有権者は政党が「保守か、リベラルか」というイデオロギー基準を最も重視するのに対して、40代以下の有権者はイデオロギーよりも、政党が「改革志向か否か」という点をより重視する傾向があることも指摘されている。保革対立が明確だった冷戦期とは異なり、現在では政党のイデオロギー的性格が似かよっているため、有権者（特に若い層ほど）はイデオロギーを手掛かりにして政党を識別することが困難になってきている。

メディアの報道では、自民や維新を「保守」、共産や社民を「革新」と規定する記事などが数多く見られるが、本書を踏まえて考えると、そのような報道は正確ではない。野党が選挙で有権者にアピールする際も同様である。冷戦があった数十年前と同じ手法で、政党に対する認識が異なる若い有権者の心をつかむことができるだろうか。

7月の参院選でも、野党は議席を伸ばせなかった。「最近の若者はわからん」などとこぼさず、日本のメディアと野党政治家こそ、一刻も早く本書を読むべきである。